

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

尾 上 一 雄

前号は休載したが、前々号（第六十七号）までの中でフーヴァーが第七十二議会第一会期（一九三一年十二月七日～三二年七月十六日）中にできる限り早く実施したいと望んだ不況対策、議会に勧告し要請したそのために必要な立法と、民主党員と反正統派（革新主義的）共和党員が提携して支配した議会との苦闘と、その成果および議会のその会期の閉会後まで続いていた「ボーナス・アーミー」（“Bonus Army”）事件などについて述べ終わつたので、本号と次号で、彼のその苦闘の成果が実際に不況の克服にどれ程役立ち、彼の計画のいくつものが議会によって実施を妨げられ或いは効果を削がれるものにされなかったとしても彼の意図通り不況は克服されることのできたかということを考察するとともに、既に始まっていた大統領選挙戦がその後の不況の進展にどのような影響を及ぼしたかということに注目しながら、この国における不況の進展と世界の他の主要諸国における不況の状況を比較し、その相違の理由を考察したい。

本題一～二十三において既に注に揭げたことがある参考文献を更に本号で掲げる場合、最初に掲げる時には著者名あるいは編者名（書名から見て明らかなもの或いは示す必要がないと認められるものは除く）および書名を明記したが、出版

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

社名、発行年等は省略した。

一

フーヴァーは、前に示したように、回顧録の中で、第七十二議会第一会期中における苦しい戦いを顧みて成功したこととうまく行かなかったこと或いは失望したことについて述べているが、そこで失望したこと第一に「全ての面での『胸がつぶれる程の』『立法の』遅延」を挙げた後、成功したと述べたことについても重大な欠陥をもつものであったことや多くの重要な提案に議会に対する勧告が拒否されたことを列挙していることに先ず注意を促したい（第六十五号二七—三〇ページを見られよ）。彼が経済上の非常事態に際して超党派の協力を訴えても民主党が優勢であった議会（前に述べたように、第七十二議会の上院は共和党議員四八名、民主党議員四七名、農民・労働議員一名で構成され、上院では共和党が第一党の地位を維持していたように見えるが、共和党議員のうち一二名は反正統派のいわゆる「革新主義的」共和黨員であり、そのうちのなん名かは多くの場合に民主党議員と手を結ぶものであり、農民・労働党議員は殆ど常に正統派共和黨員に反対するものであり、民主党が上院で五〇ないし六〇の議席を占めていたに等しく、正統の共和黨員は少数派であったし、下院は民主党議員二一九名、「革新主義的」共和黨員一五名、正統派共和黨員一九二名で構成され、下院議長は次期大統領になる野心を抱いていた民主党のジョン・N・ガーナーであり、名実ともに反フーヴァー政党に民主党に支配されていた）は、まして大統領と下院議員および上院議員（の三分の一）の選挙の年に、全面的な協力を行うとは期待していなかっただろう。民主党は共和党の大統領の指導の下で不況が克服されることを望まなかったと見ていいだろう。民主党は不況の到来こそ政権奪還の好機と見ていたからである。民主党は選

挙に備えて、フーヴァーが嫌っていた人気取りのためのポーク・バレル的な政府機関の資金の撒布を要求さえした。しかし、民主党も、実施可能なより効果があると認められる不況克服の具体策を提示することなしに、フーヴァーの勧告を全面的にしりぞけることはできなかったのである。ともかく、フーヴァーは第七十二議会第一会期中の苦闘の成果をみずから認めながら、なお成し得なかったことが多かったことを嘆かなければならなかったのである。

フーヴァーは、彼の計画が不完全にしか立法化されず、その立法も遅延の後に行われ、その上効果を大いに削がれてしまうことになるようなことが付加されたものもあり、彼が不況と戦うために必要とした更に多くの権限の獲得Ⅱ計画の実施は議会によって拒否されたが、それにも拘らず議会のその会期が終わるころ不況は底に達し会期の終了とともに景気は回復に向かい始めたと同願録の中で述べ、それを認める論者の見解、新聞の論説やその事実を示す数字を示し、彼の努力の成果を誇っている。⁽¹⁾彼は彼の計画のすべてが完全に、そして効果を削ぐことになるようなことが付加されず、かつ速やかに立法化され、実施されたら、不況の進展をもっと早くくい止めることができ、一九三二年を景気回復の年とすることができ、大統領に再選されたはずと信じていたと思われる。彼の計画がそのように実施されたとしても、それだけでこの国を不況から脱出させることができたかどうか、フランクリン・D・ローズヴェルト政権のニュー・ディールの登場を必要ないものにすることができたかどうか（それは政治史・経済史の面でも、国際関係の歴史の面でも、アメリカに異なった道を歩ませることになったかということになるが）疑問があるにしても、それについては彼の計画の欠陥を考察する際に述べることにし、ここで、多くの経済史家が見落としている「不況は一九三二年六、七月に底をつき、その後景気は好転した。もし十一月の

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

選挙で彼が落選しなかったら景気の回復は妨げられなかっただろう」と認めていると思われるフーヴァーが提示している論者の見解や新聞の論説を少し整理して紹介したい。

彼は、まず、「プリンストン大学の政治学の教授ウィリアム・スター・マイアズはザ・ガイド (The Guide) 誌の一九三九年十一月号に『現在、大不況 (the Great Depression) は一九三二年六月末か七月初めに向きを変えたと歴史は記録している。他のすべての大きな商業国で景気の回復が始まり次の二年間上昇を続けた。フーヴァー大統領は混乱に対するこの勝利に最も大きな貢献をした世界の指導者であった』と書いている」と述べたのち、レオナード・P・エアズが *Economics of Recovery* の一三七ページに述べている「この国では一九三二年の夏に『経済状態は』曲り角を回った。一九三二年にわが国の初期の景気回復を妨げた最も重要な要因は……全く政治的なものであった」という主張を示し、アーヴィング・フィッシャーも一九三三年十二月二十八日にアメリカ経済学会 (American Economic Association) で行った講演の中で「もし去年選挙が行われなかったとしたら現在われわれは景気回復への道をもっと先まで前進していただろう。景気の回復はフーヴァー氏のもとで始まったが……政治上の不安定に対する危惧のために景気の後退^{レセッション}が起った」と述べ、「ニュー・ディール『政権』の商務省でさえ一九三三年の同省^{モネ}の世界経済概観 (World Economic Review) の中で、『景気の』下降は一般的に深くかつ陰しいものであった。……合衆国では、『一九三三年の』七月から九月まで実業活動^{ビジネス}はかなり向上し、十月と十一月には大したはつきりした傾向を見せず安定していた。……選挙と新大統領の就任の間（引用者注）一九三三年十一月八日（翌年三月四日）の比較的長い間隔が実業活動^{ビジネス}に対して不安を与えるものになり更に一そうの向上に悪影響を与える要因であった」と述べ「ているし、一九三六年一月二十六日のカンザスシティ・スター (Kansas City

Star) 紙は「國際連盟の『刊行物の』」図表によれば、ここ(アメリカ合衆国)での不況は一九三二年六月にその最低点に達した。その後、夏の間突然の顯著な回復リフ・アップが起こった。十一月には悪化が始まった」と述べており、一九三六年三月九日のボルティモア・サン(Baltimore Sun)紙の中でフランク・ケントも「不況の」最低点は一九三二年六月に到達され、世界中の景氣回復はその時に始まったというのが一般的に一致した意見である」と書いており、ウォルター・リップマンは一九三三年十一月に「世界不況は一九三二年の真夏にその最低点に達した……ということを立証することになる非常に適切な統計上の証拠がある」と書き、一九三六年六月に「歴史家は……フーヴァー大統領、ミルズ[財務]長官およびマイア[連邦準備局]総裁ガバナーは……彼等が不況をくいとめた一九三二年の春に事態の本質を理解していた」と書いていると示している。更に、彼は、一九三三年七月四日のニューヨーク・タイムズは連邦準備局の前副総裁エドモンド・プラットが「もし一九三二年がたまたま大統領[選挙]の年でなかったら、その時始まっていた景氣の回復は少しも重大な中断なく続いたかも知れない」と言ったと報じ、また同紙が一九三四年六月十六日に「一九三二年後半における好転は議論の余地のないことである。この明白な信頼の回復が一九三三年二月に突然逆転させられたということも同様に真実である」と述べ、一九三五年十一月二十四日に「……方向転換の開始は一九三二年のこととされなければならない」と述べ、一九三五年十一月二十六日に「不況が一九三二年に方向を転じて以来われわれは『景氣回復の道』もはや遠くまで進んで来た」と述べ、一九三六年一月二日に「景氣の回復は……實際一九三二年に始まった」と述べていたと示しており、「ブルッキングズ研究所(Brookings Institution)も一九三七年にはほぼ同じ結論に達した」と書いている⁽²⁾。

更に、彼は「しかし景氣回復の証拠は単に意見だけではない。それは統計上の事実である」と述べ、「われわ

フーヴァー大統領の不況対策 (二十四)

れが既に述べたように、金の動き（流出入）は逆転し、危機からのわれわれの脱出に対する国際的信頼を示した。
 「開業するものを差引いた」銀行の純開業は「開業・支払停止を行うものを差引いた」純開業に変わってしまった」と述べている。⁽³⁾ 彼が「われわれが既に述べたように」と述べている箇所、彼は「恐怖の増大と減少は金の輸出入の動き——たびたび行われる将来の輸出あるいはイアマーキング（輸出のために指定しておくこと）のための契約とそれらが後に銀行に戻されることのために、実際の金の輸出に関するこの表に現われているよりもずっと大きな動き——によっても示される（プラスの符号は金の純輸入額をマイナスの符号は金の純輸出額を表わす。単位は一〇〇万ドル）」として次の表を掲げている。⁽⁴⁾

	輸出	輸入
一九三一年 十月	(-) 三三・七	
十一月		(+) 八九・四
十二月		(+) 五六・九
一九三二年 一月	(-) 七三・〇	
二月	(-) 九〇・六	
三月	(-) 二四・七	
四月	(-) 三〇・二	
五月	(-) 一九五・五	
六月	(-) 二〇六・〇	
七月	(-) 三・四	

八月	(+) 六・一
九月	(+) 二七・九
十月	(+) 二〇・六
十一月	(+) 二一・七
十二月	(+) 一〇〇・九

また銀行の閉業 (failures) が再開業 (reopenings) より多かったのが再開業の方が多くなるという「逆転」という現象があらわれたことについては、それを彼がその設立を提案し議会に勧告した復興金融公社 (Reconstruction Finance Corporation, RFC) の銀行に対する貸出しによるものとして述べながら (彼が「小さな預金者を救済するため閉鎖された銀行に対する、その資産を担保にしての貸出し」をも行わせるようにしたいと望んでいたことも、彼が要請していた「同社の貸出し条件の緩和」も彼の勧告によって生まれることになった同社の権限を拡張させる一九三二年の緊急救済および建設法 Emergency Relief and Construction Act of 1932 によって認められず、彼を失望させたことは第四十五号一二四ページに述べておいたが)、同社が銀行に貸出しを行った金額と、閉業した銀行の預金額と再開した銀行の預金額との差額を、前者が多い時はマイナス、後者が多い時はプラスの符号を付けて、次のように示している。⁽⁵⁾

	銀行への貸出し金額	閉業・再開業の銀行の預金額
一九三一年十二月	(-) 二五八、五〇〇、〇〇〇ドル
一九三二年 一月	(-) 二〇七、九〇〇、〇〇〇
二月	四五、〇〇〇、〇〇〇ドル	(-) 四二、五〇〇、〇〇〇
三月	一二七、〇〇〇、〇〇〇	(+) 四、一〇〇、〇〇〇

フーヴァー大統領の不況対策 (二一四)

フーヴァー大統領の不況対策 (二十四)

四月	一八八、〇〇〇、〇〇〇	(+) 二〇、六〇〇、〇〇〇
五月	二三六、〇〇〇、〇〇〇	(+) 一、一〇〇、〇〇〇
六月	三三一、〇〇〇、〇〇〇	(+) 二二、二〇〇、〇〇〇
七月	二二三、〇〇〇、〇〇〇	(+) 二、二〇〇、〇〇〇
八月	一〇五、〇〇〇、〇〇〇	(+) 四、〇〇〇、〇〇〇
九月	四一、〇〇〇、〇〇〇	(+) 六〇〇、〇〇〇
十月	三一、〇〇〇、〇〇〇	(+) 一八、四〇〇、〇〇〇
十一月	三二、〇〇〇、〇〇〇	(+) 三〇、八〇〇、〇〇〇
十二月	六五、〇〇〇、〇〇〇	(+) 六三、六〇〇、〇〇〇
一九三三年 一月	六四、〇〇〇、〇〇〇	(+) 二二〇、〇〇〇、〇〇〇

この表によって、復興金融公社が業務を開始した一九三三年二月初めから大統領選挙（一般投票）でフーヴァーの落選が決まる一週間前の十月末までの九カ月足らずの間に同社は一二億二七〇〇万ドルの貸出しを行ったため、もっと多くの銀行が閉業に追い込まれることを免れたばかりでなく預金の喪失が前年十二月だけにおけるその半分の少し多い一億三七一〇万ドルにとどまったことを知ることができる。フーヴァーの落選とこの表からもうかがい知ることができ銀行恐慌の勃発が時期を殆ど同じくしていることは注目すべきことであるが、銀行恐慌の原因と性格については後に述べることにしたい。しかし、ここで、復興金融公社の設立と業務の開始によって十一月にいたるまで銀行の閉業が減少し業務を再開するものが増加したことを預金額で示しているフーヴァーが掲げている表を補うために、連邦準備局が調査し公表した支払停止を行った銀行の数（正確には銀行の支払

停止件数」とそれらの銀行の預金額を一九三二年八月から一九三三年三月までの分について次のページ（第I表）に示しておく。⁽⁶⁾

更にまた、フーヴァーは「アメリカ労働総同盟は失業者の八〇万もの減少——正常な季節的傾向の反転——を公表した。〔また〕経済指標は次のような増加を示した」と述べ、「カー・ロウディング貨物積載量……二一〇%、電力消費量……一〇%、ダウ・ジョーンズ工業普通株価……八〇%」という数字を示しているが、「失業者の八〇万もの減少」も、貨物積載量・電力消費量・工業株価のそれらのような増加や上昇がいつからいつまでの間のことかということを示していない。そして、彼は「われわれの輸出額は（一九三三年）六月における一億〇七〇〇万ドルから十月には一億五三〇〇万ドルに増加した」と六月から十月末までの間にほぼ四三パーセント増加したことを述べているが、それは確かに輸出関連産業の復興を見るのに役立つものであるが、景気の動向をより明確に示す輸入額の変化については触れていない。しかし、その項の最後で、彼は「連邦準備局の〔報告の〕種々な指数は六月末から九月末までの次のような増加を示した」と述べて、次のような表を掲げている。⁽⁷⁾

農産物価格	一二%
鋁工業生産	一四%
鉄鋼生産	二〇%
織物生産	五〇%
支払い給料総額	一〇%
工場労働者の雇用	五%

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

ホームページ課題の長沢校長 (二十回)

第1表 支払停止銀行の数とその預金額 (1931年8月～1933年3月)(1) (預金額の単位は100万円)

年 月	全 銀 行 ⁽²⁾		国 法	銀 行	連邦準備制度加盟州法銀行		個人銀行および相互貯蓄銀行以外の非加盟銀行		個 人	
	行 数	預 金 額	数	預 金 額	行 数	預 金 額	行 数	預 金 額	行 数	預 金 額
1931年8月	158	180.0	29	31.6	12	52.7	110	93.9	7	1.8
9月	305	233.5	46	79.4	16	30.3	231	121.5	12	2.3
10月	522	471.4	100	111.1	25	117.3	384	236.9	13	6.1
11月	175	67.9	35	28.0	8	4.2	130	35.5	2	0.2
12月	358	277.1	63	87.4	18	25.8	267	162.3	10	1.6
1932年1月	342	218.9	74	63.5	13	10.9	248	143.1	7	1.4
2月	119	51.7	24	17.1	6	8.4	86	24.8	3	1.3
3月	45	10.9	7	4.5	33	4.8	5	1.6
4月	74	31.6	6	2.6	5	11.9	54	16.2	9	0.9
5月	82	34.4	14	6.3	6	1.2	60	26.4	2	0.4
6月	151	132.7	44	42.6	4	7.6	100	82.1	3	0.4
7月	132	48.7	20	17.7	4	1.8	105	28.5	3	0.8
8月	85	29.5	17	11.1	2	0.8	63	17.1	3	0.5
9月	67	13.5	12	3.0	4	1.7	51	8.8
10月	102	20.1	20	6.2	81	13.8	1	0.1
11月	93	43.3	19	26.2	6	3.4	68	13.7
12月	161	70.9	19	13.4	5	7.5	136	49.8	1	0.2
1933年1月	236	133.1	44	55.9	15	14.4	164	61.2	13	1.5
2月	150	62.2	20	15.9	7	7.2	118	38.0	5	1.0
3月	3,460	3,276.4	1,028	1,521.4	150	759.8	2,198	985.1	84	10.1

(1)出典は注(6)に記載。(2)相互貯蓄銀行を除く。

貨車の貨物積載量	一二%
債券売買価格	二〇%
普通株売買価格	六〇%

フーヴァーが示した一九三二年の六月末～七月初め或いは夏に不況は底に達し以後景気は回復に向かった——しかし、十一月八日に行われた大統領選挙（一般投票）における彼の敗北による、そしてそれに続くフランクリン・D・ローズヴェルトの大統領就任（翌年三月四日）までの間の約四カ月の事実上の政治的真空による政治上の不安定に対する恐怖が「景気の後退」^{リセッション}（先に示したアーヴィング・フィッシャーの言葉）を生ぜしめたが——ということを述べた論者の見解や新聞の論説がどの程度事実^にに則していたものであったかということとは、世界の他の主要国における不況の様相も見ながら、次項以降で検討することにした。

- (1) *The Memoirs of Herbert Hoover*, Vol. III: *The Great Depression 1929—1941*, pp. 163ff.
- (2) *Ibid.*, pp. 164—66.
- (3) *Ibid.*, p. 166.
- (4) *Ibid.*, p. 161.
- (5) *Ibid.*, p. 160.
- (6) *Federal Reserve Bulletin*, Vol. 23, No. 9 (September, 1937), pp. 907—910.
- (7) Herbert Hoover, *op. cit.* (*The Memoirs*, Vol. III), p. 166.

二

フーヴァーが一九三二年六月末から九月末まで景気は回復に向かっていたことを立証する連邦準備局が報告したという経済指数を回顧録の中で示していることを前項の終わりに述べたが、同じ連邦準備局が年次報告書の中に掲げている経済指数を見よう。一九三二年六月～十月だけでなく、より長い期間にわたってそれを見ることが必要だろう。第Ⅱ表―(1)に示されているように、鉱工業生産——その表に示すことができなかった一九二九年五月には、一九二三―二五年＝一〇〇とすれば、一二六(季節調整済み＝一二三)に上っていたが⁽¹⁾は、一九三二年七月に恐慌発生の前月(一九二九年九月)におけるそれ(一二三)の約四六％に落ち、それに続く大不況の時期のうちでも最低を記録したが、その後十月まで(十月をふくむ、以下同じ)増加をたどり、十一月に突如減少に転じ再び好転を見せたのは翌年四月のことである。建設契約額は——一九二八年五月には同じく一九二三―二五年＝一〇〇とすれば(以下も同じ)一五九(季節調整済み＝一三七)に上っていたが⁽²⁾——一九三二年二月には恐慌発生の前月におけるそれ(一二二)の約二二％に落ち、七月には約二八％になっていたが八月に僅か増加した後減少を続け、一九三三年三月には不況中でも最低の恐慌発生の前月(一九二九年九月)におけるその約一三％に落ち込むことになり(一九二九年六月における建築契約額のうち住宅建築契約は一〇二《季節調整済み＝九五》、その他の建設契約は一七八《季節調整済み＝一五二》、同年九月におけるそれはそれぞれ七三《季節調整済み＝七三》、一四四《季節調整済み＝一四〇》、一九三二年七月におけるそれはそれぞれ一二《季節調整済み＝一一》、四六《季節調整済み＝四〇》、一九三三年三月におけるそれはそれぞれ八《季節調整済み＝一八》——以後増加)、建設業こそ(そして、特に住宅

第Ⅱ表—(1) 鋁工業生産・雇用・取引指数 (1923—25年=100)

フ ー ブ ー 大 統 領 の 不 況 対 策 (二 十 四)	年 月	鋁 工 業						建 設		工 場		工場 支払い 金額	貨車の貨 物積載量		百貨店売 上 げ 額	
		合 計	製造工業		鋁 業		建 設		工 場		貨 車		百 貨			
			未調 整	季節 調整 済み	未調 整	季節 調整 済み	未調 整	季節 調整 済み	未調 整	季節 調整 済み	未調 整	季節 調整 済み	未調 整	季節 調整 済み	未調 整	季節 調整 済み
	1929年 3 月	124	118	126	120	101	109	121	121	101	101	111	98	105	107	112
	6 月	125	125	127	127	116	114	144	126	102	103	110	110	108	108	113
	9 月	123	121	123	121	127	118	112	110	105	102	112	121	106	117	114
	12月	96	103	93	101	110	116	84	102	95	97	99	89	102	191	108
	1930年 3 月	106	103	109	104	91	98	102	102	93	93	98	90	96	93	107
	6 月	99	98	98	97	103	102	116	99	89	90	91	95	93	98	103
	9 月	92	90	90	89	101	94	82	81	86	83	83	99	87	103	99
	12月	76	84	74	82	89	93	59	73	79	80	74	74	84	165	94
	1931年 3 月	89	87	91	87	82	89	77	77	78	78	75	75	80	92	97
	6 月	83	83	83	82	86	87	74	63	75	76	68	77	77	92	96
	9 月	77	76	76	75	83	78	59	59	75	73	62	78	69	88	85
	12月	68	74	66	72	79	84	30	38	68	69	56	61	69	143	82
	1932年 1 月	71	72	70	71	74	77	25	31	66	68	52	58	64	64	78
	2 月	71	69	70	68	75	78	23	27	67	68	54	59	62	64	78
	3 月	68	67	66	64	78	85	26	26	66	66	52	58	61	69	72
	4 月	64	63	63	61	72	80	31	27	64	64	49	57	59	74	79
	5 月	61	60	60	59	65	67	31	26	61	62	46	53	54	72	72
	6 月	59	59	58	58	62	64	32	27	59	60	43	52	52	66	69
	7 月	56	58	55	57	63	65	31	27	57	58	40	51	51	46	65
	8 月	59	60	58	59	66	65	32	30	59	59	40	53	51	49	65
	9 月	67	66	66	65	74	71	30	30	62	60	42	61	54	71	68
	10月	68	67	67	66	80	74	28	29	62	61	44	65	57	75	69
	11月	65	65	63	63	78	75	24	27	61	61	42	58	57	73	63
	12月	60	66	58	64	73	77	22	28	60	61	41	52	58	106	60
	1933年 1 月	64	65	63	63	71	73	18	22	58	59	39	51	56	49	60
	2 月	64	63	63	61	76	79	16	19	59	59	40	51	54	49	60
	3 月	60	59	58	56	74	81	14	14	57	57	37	48	50	50	57
	4 月	67	66	68	65	65	72	16	14	58	58	39	51	53	68	67
	5 月	79	78	80	77	76	78	19	16	60	61	42	56	56	67	67
	6 月	91	92	93	93	82	84	21	18	64	65	46	60	60	64	68
	12月	69	75	67	73	80	85	45	57	71	72	53	55	62	121	69

出典: Twentieth Annual Report of the Federal Reserve Board covering Operations for the Year 1933, pp.240—41.

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

建築業こそ）不況の影響を最もひどく受けたものであり、一九三二年七月に底をつき以後好転したと言うことはできないが、鉱工業生産は先に見た通りであり、そのうち工業（製造工業）生産は一九三二年七月にはそれまでの最高を記録した一九二九年五月（同じく一九三一年五月）とすれば一二八、ただし季節調整済み指数は一二三⁽³⁾）におけるその約四三％、恐慌発生の前月（同年九月）におけるその約四五％にまで落ち込み、工場雇用者数も一九三二年七月にはそれまでの最高を記録した恐慌発生の前月におけるそれ（それがそれまでの工業生産の最高を記録した同年五月）二〇二よりも多かったこと即ち同年九月には五月よりも工場労働者数は増加したのに工業生産は低下したことは注目に値するが）の約五四％に減少し、その後十月まで工場生産ほどではなかったが増加をたどり（十一月から減少し一九三三年三月に一九三二年七月と同じ程度まで低下し、その後再び増加をたどった）、工場で支払われた賃金総額は一九三二年七月と八月にはそれまでの最高の恐慌発生の前月（一九二九年九月）におけるその約三六％（それまでの最低）に低下し、その後十月まで増加をたどり（十一月からまた減少し一九三三年三月に不況中の最低水準まで下った）、貨車に積込まれた貨物も一九三二年七月に恐慌発生の前月（一九二九年九月）におけるその約四二％に減少し、その後十月まで増加をたどり（十一月からまた減少し一九三三年三月に不況中の最低水準まで減少した）、百貨店の売上げ額も一九三二年七月に恐慌発生の前月におけるその約三九％に減少した後その年の年末まで増加し（十二月にはクリスマスのための買い物で売上げが急増し一月には激減するのが常であるが）、一月に激減したが三月には一、二月より増加したにしても、季節調整済みの売上げ指数は一九三二年七、八月にそれまでの最小を示し、以後増大し十一月から減少し一九三三年三月に一九三二年七月より小さくなり、以後再び増大している。

それらのことは、不況は一九三二年七月に底をつき以後景気は回復に向かったということを、十一月（大統領

第Ⅱ表—(2) 製造工業生産指数（季節調整済み、1923—25年=100）

年 月	全製造業	鉄鋼	織物	食品	材木	自動車	皮革および製品	石油精製	ゴムおよびチューブ	タバコ製品
1929年	119	130	115	97	91	135	104	168	135	134
1930年	95	94	91	93	64	85	92	161	100	131
1931年	80	60	94	90	41	60	90	155	96	123
1932年	63	31	83	87	25	35	85	140	78	111
1933年	76	53	97	92	32	49	97	145	88	116
1932年 1月	71	44	89	93	26	45	83	140	92	124
2月	68	42	86	90	22	35	87	141	85	114
3月	64	35	82	83	26	28	90	138	73	109
4月	61	32	65	91	27	35	87	146	70	109
5月	59	29	59	90	28	45	82	148	72	110
6月	58	26	63	82	26	47	79	148	107	118
7月	57	25	69	82	25	33	74	140	89	114
8月	59	23	90	85	23	23	81	136	68	108
9月	65	28	104	94	23	24	91	133	64	111
10月	66	31	99	89	24	16	93	137	68	104
11月	63	31	92	83	21	31	89	138	73	104
12月	64	28	91	84	23	60	85	132	67	112
1933年 1月	63	30	87	88	26	48	86	132	59	113
2月	61	31	83	84	20	33	92	132	54	115
3月	56	22	76	84	22	27	84	135	41	99
4月	66	35	85	101	24	44	93	140	65	116
5月	78	49	108	99	30	51	110	147	94	143
6月	93	72	133	100	38	66	114	154	115	135

出典：Ibid., p. 242.

選挙でフーヴァーが敗れた月）に景気は再び悪化し翌年三月（フランクリン・D・ローズヴェルトが大統領に就任した月）には一九三二年七月における状態に近い程度まで悪くなったということとともに、示している。

このことを第Ⅱ表—(2)の業種別に示した製造工業生産指数（季節調整済み）でもっと立入って見ると、製造工業生産は一九三二年七月にそれまでの最低にまで落ちた後十月まで増加し続けたが十

フーヴァー大統領の不況対策 (二十四)

一月から低下し続けることになったということを知ることができただけでなく、タバコのような嗜好品、食品のような生活必需品で永く保存できないもの、非耐久あるいは半耐久消費材の生産部門と、自動車(一般乗用車にしてもまだ現在ほど多くの人の生活必需品になっていなかった)のような耐久材の生産部門と、鉄鋼、木材などのような生産材生産部門に対する不況の影響あるいはそれらと不況との関係は著しく異なっていたことを知ることができらるだろう。

次に卸売物価であるが、第Ⅲ表で見る通り、農産物、食品およびその他の商品をふくむ調査された全商品についてのそれは一九三二年六月には恐慌発生の前月(一九二九年九月。一九二六年Ⅱ一〇〇とすれば九六・一)⁽⁴⁾の約六六％に下り(それは多分一九一一年以来最低を記録した)⁽⁵⁾、七月から九月まで上昇した後十月から再び下降に転じ翌年二月に底をつき三月から上昇しており、農産物と食料品のそれらだけは同じ傾向を見せているが、その他の商品のそれは一九三二年七月からではなく八月から上昇した後(一九三二年七月におけるそれは一九二九年九月のその約七六％に下ったが)十月から再び下降に転じ、翌年五月から上昇に向っている。なお、卸売物価の動きを見て興味をそえられることは、一九二〇年代のブームの時代における鉱工業生産の伸びに比較してその間における卸売物価(農産物および食料品のそれらを除く)はそれほど下っていないということ(鉱工業生産は、一九三二―三五年Ⅱ一〇〇とすれば、一九二六年には一〇八、一九二七年には一〇六、一九二八年には一一一、一九二九年一月には一一七、同年五月には一二六、そして同年九月には一二三であったが、農産物・食料品以外の商品の卸売物価は、一九二六年Ⅱ一〇〇とすれば、一九三二―三五年には一〇二・二、一九二七年には九四・〇、一九二八年には九二・九、一九二九年一月には九二・三、同年五月には九一・五、翌六月には九一・九、九月には九一・六であった)、そして恐慌発生後も鉱工業生産の減退に比

第Ⅲ表 卸売物価指数 (1926年=100)

	全商品	農産物	食料品	その他の商品			
				その他の 全商品	織物	金属および 金属製品	建築用材 資
1928年	96.7	105.9	101.0	92.9	95.5	97.0	94.1
1929年	95.3	104.9	99.9	91.6	90.4	100.5	95.4
1930年	86.4	88.3	90.5	85.2	80.3	92.1	89.9
1931年	73.0	64.8	74.6	75.0	66.3	84.5	79.2
1932年	64.8	48.2	61.0	70.2	54.9	80.2	71.4
1933年	65.9	51.4	60.5	71.2	64.8	79.8	77.0
1932年 1 月	67.3	52.8	64.7	71.7	59.6	81.8	74.8
2 月	66.3	50.6	62.5	71.3	59.5	80.9	73.4
3 月	66.0	50.2	62.3	70.9	58.0	80.8	73.2
4 月	65.5	49.2	61.0	70.9	56.1	80.3	72.5
5 月	64.4	46.6	59.3	70.4	54.3	80.1	71.5
6 月	63.9	45.7	58.8	70.1	52.7	79.9	70.8
7 月	64.5	47.9	60.9	69.7	51.5	79.2	69.7
8 月	65.2	49.1	61.8	70.1	52.7	80.1	69.6
9 月	65.3	49.1	61.8	70.4	55.6	80.1	70.5
10月	64.4	46.9	60.5	70.2	55.0	80.3	70.7
11月	63.9	46.7	60.6	69.8	53.9	79.6	70.7
12月	62.6	44.1	58.3	69.0	53.0	79.4	70.8
1933年 1 月	61.0	42.6	55.8	67.3	51.9	78.2	70.1
2 月	59.8	40.9	53.7	66.0	51.2	77.4	69.8
3 月	60.2	42.8	54.6	65.8	51.3	77.2	70.3
4 月	60.4	44.5	56.1	65.3	51.8	76.9	70.2
5 月	62.7	50.2	59.4	66.5	55.9	77.7	71.4
6 月	65.0	53.2	61.2	68.9	61.5	79.3	74.7

出典：Ibid., pp. 250—51

較して同じく農産物
・食料品以外の商品
の卸売物価はそれほ
ど下っていないとい
うこと(前者は、一九
三三—三五年＝一〇〇
とすれば、一九三〇年
には九六、一九三一年
には八一、一九三二年
一月には七一、同年六
月には五九、同年十月
には六八、一九三三年
三月には六〇であった
が、後者は、一九二六
年＝一〇〇とすれば、
一九三〇年には八五・
二、一九三一年には七

フーヴァー大統領の不況対策（二十四）

五・〇、一九三二年一月には七・七、同年六月には七〇・一、同年十月には七〇・二、一九三三年三月には六五・八であった⁽⁶⁾、農産物の卸売価格（農民の受取り価格は別問題である）は、恐慌前から異常に下つていたように思われるが事実はそうでなく（一九二六年＝一〇〇とすれば、一九二七年には九九・四、一九二八年には一〇五・九、一九二九年七月には一〇七・六、同年九月には一〇六・六であった）、その後の下落が激しかった（同じく一九二六年＝一〇〇とすれば、一九三〇年一月における一〇一・〇から年末までに七五・二に下り、一九三二年十二月には五五・七に、一九三三年六月には四五・七に下り、その後少し上った後十月から再び下り始め、翌年二月には四〇・九に下った）ということである⁽⁷⁾。

株価も、第Ⅳ表で見れば一九三二年六月に底をつき——正確には、「七月八日、ダウ・ジョーンズ工業株価はどん底に達した」——、七月から九月まで上昇し、十月から再び下り始め、翌年一月には少し持ち直したものの三月まで下り続け四月から上昇に向っている。一九二九年十月の株価の暴落まで公益事業株の暴騰はとくに著しかった（一九二六年の年間平均を一〇〇とすれば、一九二六年七月には一〇〇・二であったが、その二年一ヵ月後の一九二八年八月には一五五・八に五五％以上も上り、次の一年一ヵ月後の一九二九年九月には三二一・〇に更に二倍以上に暴騰している⁽⁸⁾）が、一九三二年六月までのその後の暴落も著しかったにしても、鉄道株の暴落ほど激しくなかったし、一九三二年九月には工業株や鉄道株よりも一九二六年の水準に近づいていた。社債券も、第Ⅳ表に示したように、一九三二年六月に底をつき七月から九月まで上昇し、十月から再び下り始め、翌年一月には持ち直したものの四月まで下り続け五月から上昇に転じている。合衆国国債の市場価格は社債券のそれや株価のような大きな変動を見せていないが、それでも一九三二年七、八月から十月まで上り続けた。それは一九三二年一月に九三・〇という連邦準備局がその平均価格を算出し始めて以来の最低まで下り、四月に九九・二まで上った後、五、六月に少し

第IV表 国債・社債・株式市場価格指数

年 月	合衆国 国 債	社 債 (60銘柄)※	普 通 株 (1926年=100)			
			合 計 (421銘柄)	工 業 株 (351銘柄)	鉄 道 株 (33銘柄)	公益事業株 (37銘柄)
1928年	103.9	100.8	149.9	154.3	128.5	148.9
1929年	100.9	98.0	190.3	189.4	147.3	234.6
1930年	104.2	99.3	149.8	140.6	124.9	214.6
1931年	103.1	90.9	94.2	86.9	72.1	147.9
1932年	99.2	69.5	48.4	46.3	26.2	78.8
1933年	102.2	73.4	63.4	66.2	38.0	78.0
1929年 9 月	100.0	96.6	225.2	216.1	168.1	321.0
1932年 1 月	93.0	75.1	58.0	54.4	36.6	94.4
2 月	94.8	74.9	56.5	52.9	34.2	92.8
3 月	97.0	75.9	56.8	53.8	32.1	93.4
4 月	99.2	67.9	43.9	41.7	22.2	73.3
5 月	98.7	62.2	39.8	38.1	17.4	67.8
6 月	98.7	60.6	34.0	33.5	14.1	55.0
7 月	100.3	62.1	35.9	35.8	15.6	55.4
8 月	100.3	72.4	53.3	51.5	29.2	84.2
9 月	101.7	74.6	58.2	55.8	34.5	91.4
10月	101.8	70.8	49.9	47.7	27.5	80.6
11月	101.7	69.2	47.5	45.4	25.5	77.6
12月	102.3	67.7	47.4	44.8	25.7	79.6
1933年 1 月	103.3	70.7	49.1	46.2	27.6	81.8
2 月	102.4	68.5	44.9	42.5	26.7	73.1
3 月	101.0	66.0	43.2	41.6	25.6	67.0
4 月	101.3	64.8	47.5	48.8	26.3	63.5
5 月	102.4	72.4	62.9	65.3	37.5	79.2
6 月	103.2	77.7	74.9	77.3	44.0	96.9

※ それぞれ20銘柄の工業社債、鉄道社債、公益事業社債。
出典：Ibid., pp. 232—33.

フーヴァー大統領の不況対策 (二十四)

下り、七、八月から十月まで上り、十一月に少し下り、十二月と翌年一月に少し上ったものの二月、三月は下り続けたのである。そのような動きは合衆国政府の信用度の変化を或る程度示していると言っていいたいだろう。

要するに、不況は、フーヴァーが示した論者の見解や新聞の論説や連邦準備局が提供したという簡単な統計上の数字通り、六月末か七月初めに底をつき、景気は回復に向かい始めたのである。われわれは、不況を克服し景気を回復させるためのフーヴァーの計画が第七十二議会第一会期において承認されただけでも彼が望んでいたようにもっと早く承認され実施されていたとしたら、そのような景気の回復の動きはもっと早くからあらわれ、容易にくずれることはなかったと思うが、このことについては後に述べることにする。ともかく、十、十一月から景気は再び悪化の様相を示すことになったこともフーヴァーが述べている通りであるが、その理由が大統領選挙戦におけるフーヴァーの苦戦と敗北とそれに続く政治的不安によるものか、「一九三二～三三年の銀行恐慌」(the Banking Crisis of 1932-1933)と呼ばれているものによるものか、そもそもその銀行恐慌はなにによるものか、それを予防する方策はフーヴァーの計画の中になかったのかということとは、後に検討したい。

- (1) *Twentieth Annual Report of the Federal Reserve Board covering Operations for the Year 1933*, p. 240.
- (2) *Ibid.*, p. 239.
- (3) *Ibid.*, p. 240.
- (4) *Ibid.*, p. 251.
- (5) U. S. Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1970*; Part I, p. 200. を参照。

- (9) *Twentieth Annual Report of the Federal Reserve Board*, pp. 236, 240—41, 250—51.
- (7) *Ibid.*, pp. 250—251.
- (8) Peter Wyckoff, *Wall Street and the Stock Market: A Chronology* (1644—1971) (Philadelphia: Chilton Book Company, 1972), p. 75.
- (9) *Twentieth Annual Report of the Federal Reserve Board*, pp. 232—33.
- (10) *Ibid.*, pp. 232 footnote, 233.

三

先にフーヴァーが「大不況は一九三二年の六月末か七月初めに向きを変えたと歴史は記録している。他のすべての大きな商業国で景気の回復が始まり次の二年間上昇を続けた。フーヴァー大統領は混乱に対するこの勝利に最も大きな貢献をした世界の指導者であった」とプリンストン大学の政治学の教授ウィリアム・スター・マイアズがザ・ガイド誌 (*The Guide*) の一九三九年十一月号に書いていると満足そうに述べていることを示したが、この文に述べた三つの事項のうち第一のことは前項で見た通りであり、(しかし、「歴史は記録している」という言葉は「歴史家は述べている」と解釈してはならない。その事実注目している歴史家は少ない、殆どいないと言っているからである)、第二のことについては特に「他のすべての大きな商業国で景気……〔は〕次の二年間上昇を続けた」ということに問題があるにしても(「二年間」というのは誤りだろう。一九二七―三五年の世界の主要国の鉱工業生産指数を示した第Ⅴ表を見よ)、特に第三のことは誤っていると言わなければならない。

第V表 世界の主要国の鉱工業生産指数 (1929年=100)

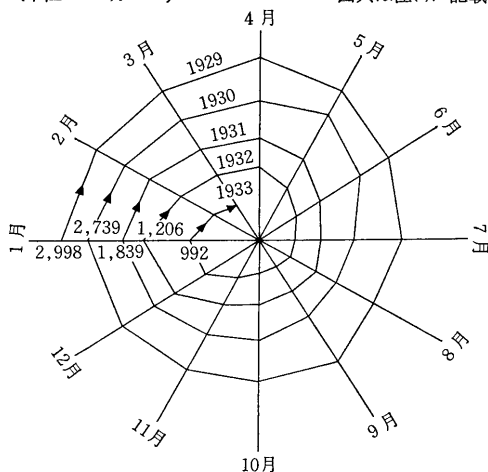
年 国	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935
ベルギー	93	99	100	89	81	69	71	72	83
カナダ	83	93	100	85	72	58	60	74	81
フランス	79	91	100	100	89	69	77	71	67
ドイツ	102	99	100	86	68	53	61	80	94
イタリア	—	92	100	92	78	67	74	81	92
日本	83	90	100	95	92	98	113	129	142
ラテン	86	98	100	91	79	62	69	70	66
イギリス	96	94	100	92	84	84	88	99	106
USA	89	93	100	81	68	54	64	66	76
ソ連	64	80	100	131	161	183	198	238	293

フーヴァー大統領の不況対策 (二十四)

出典: *Statistical Yearbook of The League of Nations 1935/7 (Geneva)*

第V表で見る通り、いわゆる「世界恐慌」は世界的な大不況の圏外にあったソ連は別として、不況からの脱出は日本が最も早く、次いでイギリスであった。アメリカにおける不況は一九四〇年まで続いたのであり、アメリカが、とくに一九三二年夏からフーヴァー政権の末期までの間に、世界の「大きな商業国」を不況から脱出させる牽引力になった証拠は見いだすことはできないし、フーヴァー大統領が「混乱に対する勝利に最も大きな貢献をした世界の指導者であった」と言うことは残念ながら否定しなければならない。そう言うことができるためには、アメリカ自身の景気を他の国より早く回復させ、第一次世界大戦後にヨーロッパ諸国の復興を助けたように対外投資を復活させるか、輸入を増加させるようにしなければならなかっただろう。一九三一年にフーヴァーがヨーロッパ諸国の経済的危機を救済し、それによってアメリカの不況をも克服しようと努めたことは既に述べたところであるが、彼がそのように国内よりもヨーロッパに目を向けている間にアメリカ自身の不況は悪化をたどっていたのである。アメリカの対外投資の減少が世界恐慌の重要な原因の一つと言わなければならないが、いよいよ対外投資能力を失

世界の75ヵ国の輸入総額（1929年1月～1933年3月）
（単位：100万ドル） 出典は注(4)に記載



フーヴァー大統領の不況対策（二四四）

って来れば、それどころかその引き揚げを行うにいたれば、諸外国の、世界的不況からの脱出に貢献したと言えるところではない。アメリカの対外投資額（短期信用をふくむ）は一九二九年における一七〇・一億ドル（うち、直接投資七五・五億ドル、証券投資七八・四億ドル、短期信用一六・二億ドル）から一九三五年には一三六・九億ドル（うち、直接投資七二・二億ドル、証券投資五六・二億ドル、短期信用八・五億ドル）に減少している。⁽¹⁾

アメリカの貿易（商品のみ）は一九二九年における輸出（再輸出をふくむ、以下同じ）五二・四億ドル、輸入四四・〇億ドルから一九三二年には輸出二四・二億ドル、輸入二〇・九億ドルに、一九三三年には輸出一六・一億ドル、輸入一三・二億ドルに減少したのである。⁽²⁾ フーヴァーは、先に示したように、「われわれの輸出額は「一九三二年」六月における一億〇七〇〇万ドルから十月には一億五三〇〇万ドルに増加した」と述べているが、この程度の輸出増加では国内産業の復興の牽引力になり得ない。もともとアメリカの輸出依存度は低く、農業以外の産業の発達にヨーロッパ大戦とその前の南阿^{ブラ}戦争の時期以外のアメリカにとっての平時においてそれまで輸出の増加が大きく寄与したことはなかった。そのことはともかく、先にフーヴァーは一九三二年六月から十月までの輸出の増加について述べながら輸入については触れていないことを指摘したが、この期間にアメリカは輸

フーヴァー大統領の不況対策 (二十四)

入超過の記録を残しているのである。即ち、一九三一年第一・四半期における貿易尻は六八五〇万ドルの輸出超過、同年第二・四半期におけるそれは五〇〇万ドルの輸出超過、同年第三・四半期におけるそれは六八三〇万ドルの輸出超過、同年第四・四半期におけるそれは七八四〇万ドルの輸出超過、そして一九三二年第一・四半期におけるそれは四三七〇万ドルの輸出超過、同年第二・四半期におけるそれは一六一〇万ドルの輸出超過を示していたのに、同年第三・四半期(七・九月)におけるそれは七〇〇万ドルの輸入超過を示し、同年第四・四半期におけるそれは三二四〇万ドルの輸出超過を示した。⁽³⁾ いずれにせよ、僅かな輸出の増加を僅かに上回る輸入の増加(「僅かな輸入超過」)では世界の景気を好転させるのに貢献したとは言えない。

なお、世界の貿易は、前ページの図が示すように、一九二九年一月から一九三三年三月までまさに螺旋形をえがきながら収縮したのである。⁽⁴⁾ このことに対してフーヴァーは責めを負うべきであるとフランクリン・D・ローズヴェルトは多くの学者とともに主張したのである。そのような非難に対するフーヴァーの反論は既に述べたが、なおこの問題についての大統領選挙戦中のローズヴェルトの攻撃とフーヴァーの反論は後に述べたい。

- (1) Cleona Lewis, *America's Stake in International Investments*, p. 605. なお、ウィリアム・ウッドラフによれば、アメリカの民間国際長期投資額は一九二四年における一〇〇億ドル(うち、直接投資五四億ドル、証券投資四六億ドル)から一九二九年には一五二億ドル(うち、直接投資八〇億ドル、証券投資七二億ドル)に増加し、一九三五年には一二六億ドル(直接投資七八億ドル、証券投資四八億ドル)に減少した。William Woodruff, *America's Impact on the World: A Study of the Role of the United States in the World Economy, 1750-1970* (London: The Macmillan Press Limited, 1975), p. 235.

- ② U.S. Bureau of the Census, *op. cit.*, Part II, p. 884.
- ③ Charles P. Kindleberger, *The World in Depression 1929—1939* (London: Allen Lane The Penguin Press, 1973), p. 189.
- ④ *Ibid.*, p. 172.

〔以下次号〕